



Title	Impact of the Patency of Inferior Mesenteric Artery on 7-Year Outcomes After Endovascular Aneurysm Repair
Author(s)	井手, 亨
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/93048
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論 文 内 容 の 要 旨
Synopsis of Thesis

氏 名 Name	井手 亨
論文題名 Title	Impact of the Patency of Inferior Mesenteric Artery on 7-Year Outcomes After Endovascular Aneurysm Repair (EVAR7年後成績における下腸間膜動脈開存の影響)
論文内容の要旨 〔目 的 (Purpose)〕 腹部大動脈瘤 (AAA) 手術において、低侵襲性や良好な早期成績を背景にステントグラフト手術 (EVAR) が普及している。しかし、エンドリークによって遠隔期に瘤径拡大を来し、再治療を要する症例があり、臨床的課題である。最も頻度の高いエンドリーク (EL) はType2 ELであり、当施設のリスク解析で下腸間膜動脈 (IMA) の開存は有意な寄与因子の一つであった。これまでに詳細な解剖学的情報を含む背景因子を調整してEVAR後の遠隔期成績におけるIMAの影響を評価した先行研究はない。今回我々はIMAのEVAR後の遠隔期成績に与える影響を評価することを目的とした。 〔方法ならびに成績 (Methods/Results)〕 方法：2006年1月から2019年12月までに当施設で施行したAAAに対するEVARは556例あり、EVARに保険償還機種を使用し、術後Type1もしくは3 ELを認めず、1年以上のフォローアップ期間を有する336例を対象とした。術前IMAの開存の有無をもとにIMA開存群・閉塞群の2群に分け、背景因子をPropensity score matchingし、遠隔期成績を比較検討した。 結果：IMA開存群228例、IMA閉塞群108例であり、Matching前の背景因子に関して術前瘤径 ($p<0.001$) と腰動脈 (LA) の分布 ($p=0.025$) において2群間に有意な相違を認めた。Matching後、両群86例ずつとなり、背景因子について2群間に有意差を認めなかった。観察期間中央値は56 (IQR:32-94) ヶ月であった。術後初回CTにおけるType2 ELの発生率はIMA開存群で50%、IMA閉塞群で19%であった ($p<0.001$)。IMA由来、LA由来Type2 ELの発生率ともにIMA閉塞群に対しIMA開存群で有意に高率であった ($p<0.001$, $p=0.002$)。Type2 ELによる瘤径拡大回避率はIMA開存群 69%/7年に対し、IMA閉塞群 94%/7年で有意に高率 ($p<0.001$) であった。再治療回避率についてもIMA開存群 74%/7年に対し、IMA閉塞群 90%/7年で有意に高率であった ($p=0.007$)。AAA関連死や全死亡については両群間で有意差を認めなかった。 〔総 括 (Conclusion)〕 IMAの開存はEVAR後の再治療や瘤径拡大に対して有意な影響を認めたが、死亡率に対する有意な影響は認めなかった。EVAR後の遠隔期成績を改善する上で術前のIMAを評価・閉塞することは重要と考えられる。	

論文審査の結果の要旨及び担当者

(申請者氏名)		井手 亨	
論文審査担当者	(職)	氏	名
	主 査	大阪大学教授	宮川 繁
	副 査	大阪大学教授	上野 高義 ¹⁾
	副 査	大阪大学教授	坂田 泰史

論文審査の結果の要旨

腹部大動脈瘤に対するステントグラフト内挿術(EVAR)は、低侵襲性を背景に普及が進んできた。その一方で、Type2エンドリーク(EL)により遠隔期に瘤径拡大を来し、再治療を要す症例や破裂に至る症例があり問題となっているが、Type2ELによる遠隔期イベント発生の寄与因子は不明である。本研究の目的は、Type2ELの流入源である下腸間膜動脈(IMA)の開存が遠隔期イベントに与える影響を明らかにすることである。

本研究では、患者背景をマッチングし、遠隔期のイベントの発生率をIMA開存群とIMA閉塞群の2群間で比較した。その結果、IMA開存群では有意にType2ELの発生率、瘤径拡大率や再治療率が高率であることを示した。

本研究は、IMAがEVAR後の遠隔期イベントに与える影響を明らかにするとともに事前にIMAを塞栓することにより遠隔期成績が改善する可能性を示し、治療成績の改善に寄与するものであると考えられ、学位に値するものと認める。